

山城高等学校校歌

竹友 藻風 作歌
中瀬古 和 作曲

Allegretto

ナ ラ ビ ガ オ カ ニ カ ネ ナ リ テ ナ
あ た ご の み ね に く も は れ て ひ mp

ガ レ サ ヤ ケ キ カ ツ ラ ガ ワ オ
か げ さ し そ う に せ の き よ う さ

ム ロ ノ サ ク ラ サ キ ニ オ ウ き マ
が の を わ た る か ぜ き よ , decresc.

ナ ビ ノ イ エ ノ ト メ ウ デ タ サ ヨ セ イ
な び の そ の の め で た さ よ へ い

ギ シ ン ジ ッ セ キ ニ ン ノ イ
わ き よ う り よ く ゆ け あ い の ひ

ノ チ ミ ナ ギ ル ワ レ ラ ヤ マ シ ロ
か り あ ま ね き わ れ ら や ま し ろ

山城高等学校校歌

竹友 藻風 作歌
中瀬古 和 作曲

双ヶ丘に鐘鳴りて

流れさやけき桂川

御室のさくら咲き匂ふ

学びの家のたふとさよ

正義 真実 責任の

命みなぎるわれら山城

愛宕の峰に雲晴れて

日かげさしそふ西の京

嵯峨野をわたる風清き

学びの園のめでたさよ

平和 協力 友愛の

光あまねきわれら山城

校歌

作詞 寺脇 房市
作曲 中瀬古 和

紺碧に澄む琵琶の湖
愛の光ぞ溢ふれける
妙なる風情称えつつ
学びの業にいそしまん
新たな文化造るため
日本少女ひとすじに
ああ、かぐわしき我が学び舎
揺籃の庭ぞここ
滋賀女子高校

一

女のまき道修めなん
久遠の理想掲ぐため
日本少女ひとすらに
ああ、いつくしき我が学び舎
はぐくみの庭ぞここ
滋賀女子高校

二

紫匂う比良比叡
智慧の光ぞ輝やける
娟なる景色頌しつつ

三

緑に映ゆる純美礼の園
霊の光ぞ満ちにける
栄えある誉れかざしつつ
床しき婦徳履みゆかん
平和の世界築くため
日本少女もろともに
ああ、うるわしき我が学び舎
培いの庭ぞここ
滋賀女子高校

滋賀女子高等学校々歌

第三節 学校運営の刷新・整備

生徒急増と 昭和三六年度の生徒定員は、本科九〇〇名、教職員組織の強化 専攻科五〇名、被服科(別科)一〇〇名であった。但し、被服科は昭和三一年度以降募集を停止していた。それに対し、実生徒数(五月一日現在)は、本科一、〇八二名、専攻科六一名、計一、一四三名で、いずれも定員を超過していた。

しかし、入学志願者の激増に対応し、昭和三七年度は鶴ヶ丘校舎は未完成であったが、学則を改正、本科の生徒定員を一、五〇〇名(入学定員五〇〇名)に増員し、四月七日の入学式は新入生五〇九名を迎え本校開設以来の膨張ぶりで滋賀会館大ホールを借用して盛大に行われた。

第一期(本館)新築工事が竣工し二年生以上を新校舎に収容した昭和三八年度は、本科の生徒定員を更に一、八〇〇名に増員し、生徒急増の続く四〇年度まで毎年本科の入学定員を六〇〇名とした。昭和四〇年度には、本科一、八一〇名、専攻科五四名、計一、八六四名で、本校の歴史上、前後を通じて最大の生徒数となった。

生徒数の推移(五月一日現在)

年度	本科			専攻科	計	学級数
	一年	二年	三年			
三六	三五八	三四九	三七五	六一	一四三	一七
三七	五〇九	三四九	三四七	六五	一七〇	一八
三八	六三四	五〇六	三四一	七〇	一五五	二五
三九	六二八	六三一	五〇三	五六	一八一	二九
四〇	五六一	六三二	六二七	五四	一八四	三〇

昭和三八年度以後の生徒数の急増と二校舎分離に対応して、教職員組織の強化が図られた。昭和三六年度の専任教員二三名、実習助手二三名、事務職員二名に対し、三八年度には専任教員四八名、実習助手一九名、事務職員九名、用務員五名となり、実習助手を除き教員、事務職員、用務員においてそれぞれ二倍以上に増加した。昭和三六年から四〇年までの年度別教職員数は次の通りである。

教職員数の推移(五月一日現在)

年度	教員	実習助手	事務職員	用務員	計
三六	二三	二三	二	〇	四八
三七	三一	二四	三	三	六一
三八	四八	一九	九	五	八一
三九	四九	一九	〇	四	八二
四〇	四六	二七	一〇	四	八七

(備考) 本務者のみ

校章・校章解説



「滋賀女子高等学校」ならびに「純美禮学園」の2つの頭文字の「S」と旧滋賀県章の六角形とを組み合わせ、その中央に「高」の文字を配したもので、これを純真、清楚の意をもつ白色とし、地色は希望と明快、平和の象徴である金茶色の七宝にしてある。

新校章の制定は昭和36年4月旧校名、大津家庭高等学校を「滋賀女子高等学校」と改名したときに行われた。

校 歌

♩=88

mf

1. こんべ きにすむ
2. きにおう
3. にほゆる

びわのうみ あいーのひかりぞあふれける たえなるふせい
ひらひえ いちえーのひかりぞかかーやける えんなるけしき
すみれのそ のたまーのひかりぞみちーにける はえあるほまれ

たえ ふせい
妙なる風情称えつつ

わさ
学びの業にいそしまん

くおん かか
新たな文化造るため
久遠の理想掲ぐため

やまとおとめこ
日本少女ひとすじに

ああ かがわしき我が学び舎

ようらん
挿籃の庭ぞここ

滋賀女子高校

たたえ つ つ まなびのお ぎーにい そーしまん あらたな かり
しょうし つ つ おみなのお きみちお きーめなん くおんのり
かざし つ つ ゆかしき ふ とーくふ りーゆかん へいおのせ

ふ
ああ うるわしき我が学び舎

つちか
培いの庭ぞここ

滋賀女子高校

dim. *mf*

んか つくるため やまとおとめひとすじに ああ かがわしき我がまなび
そう かがくため やまとおとめひとすらに ああ いつくしき我がまなび
かい さずくため やまとおとめもろともに ああ うるわしき我がまなび

mf *f*

1. 2. 3.

や ようらんの にわぞ ここ 滋賀女子高 校
や はくくみの にわぞ ここ 滋賀女子高 校
や つちかいの にわぞ ここ 滋賀女子高 校

2. びらさ
3. みどり 校

寺 脇 房 市 作詞
中瀬古 和 作曲

- | | | | | | |
|---|--|----|--|-----|--|
| I | 紺碧に澄む琵琶の湖
愛の光ぞ溢れける
妙なる風情称えつつ
学びの業にいそしまん
新たな文化造るため
日本少女ひとすじに
ああ かがわしき我が学び舎
挿籃の庭ぞここ
滋賀女子高校 | II | 紫匂う比良 比叡
智恵の光ぞ輝ける
媚なる景色頌しつつ
女のまさ道修めなん
久遠の理想掲ぐため
日本少女ひとすらに
ああ いつくしき我が学び舎
はくくみの庭ぞここ
滋賀女子高校 | III | 翠に映ゆる純美禮の園
霊の光ぞ満ちにける
栄えある誉れかざしつつ
床しき婦徳履みゆかん
平和の世界築くため
日本少女もろともに
ああ うるわしき我が学び舎
培いの庭ぞここ
滋賀女子高校 |
|---|--|----|--|-----|--|